



東海支部報

日本山岳会東海支部

No. 153 April. 1. 2018

発行 公益社団法人
日本山岳会東海支部

〒460-0014 名古屋市中区富士見町8-8 OMCビル

電話：052-332-8363 FAX：052-322-7924

郵便口座 00800-5-13749 「日本山岳会東海支部」

銀行口座 三菱東京UFJ銀行 覚王山支店

普通1222073 「日本山岳会東海支部」

編集 星 一男

印刷 (株) 浅井隆文社



登山学校上級クラス(ハヶ岳・硫黄岳) 本文P2参照

目次

○東海支部の登山学校 第Ⅱ期開校 榊 将美	2	○東海支部の蔵書からの一冊⑮ 石田文男	12
○学生強化プロジェクト 「プロジェクトK」実施にあたり 高橋玲司	4	○エリザベス・アン・ ホーリー女史逝く 杉田 博	14
○Canada Northan Cariboo山群 スキー縦走プラン2018 菊池 徳	5	○同好会コーナー スケッチ/塩の道	15
○平成30年新年懇親会報告 毛利邦男	6	○支部友コーナー 金谷正起	16
○4番目の支援登山 「身柄付補導委託登山」 前田隆久	7	○委員会報告 自然保護/山行 /技術向上	17
○東海岳人列伝(9) 西山秀夫	8	○会務報告 毛利邦男	20
○リレーエッセイ⑧その2 安藤忠夫	10	○ルーム日誌・会員異動 毛利邦男	23
		○INFORMATION	25
		○編集後記 星 一男	

東海支部登山学校第Ⅱ期開校

登山学校運営委員会委員長 榎 将美

日本山岳会東海支部は、昨年7月に 1. 自立登山者の育成 2. 未組織登山者への安全登山の啓蒙と指導 3. JAC会員の入会促進 4. 東海支部の人材育成を目的として登山学校を開校しました。

第Ⅰ期は初級教室45名、中級教室36名、上級教室8名、計89名の受講生を得てスタートすることになりました。中にはツアー登山と勘違いしている受講生もいましたが概ね真摯に山に向き合い「自分自身の登山」を目標に机上講習、現地山行に臨まれていました。事実、回を重ねる度に進歩する受講生が多数いるのには驚かされます。

これは講師陣が繰り返し登山の基本的な知識、技術を指導し、受講生がそれぞれ自ら計画を立てて「自立した登山者」になることを指導の主眼とした証であると自負しています。

反面多くの課題が浮き彫りになってきました。受講生の人数が当初予想を大幅に上回り講師陣の体制が後手に回ってしまい①登山学校運営規約が徹底しなかったこと②講師陣の計画から運営までの負担が大きいこと③事故へのバックアップ体制が明確でないこと④技術などの指導要領が不統一なこと等運営している途中で改善を試みましたが道半ばで、第Ⅱ期への課題となりました。

第Ⅱ期登山学校は平成30年7月7日に開校します。平成30年1月からその準備にあたり①登山学校運営規約の見直し②受講生の継続意思の確認③初級・中級・上級各教室の指導要領の作成④初級・中級・上級各教室の年間カリキュラムの作成⑤共同備品の調達等を進めてきました。

特に各教室内での指導に格差が生じないよう指導要領を作成し、どのクラスでも横の均一的な指導が受けられるように改善を進めています。更にステップアップを希望する受講生のために初級⇒中級⇒上級の縦の面の指導要領を明確にしました。

登山学校の役割のもう一面は山の楽しみ方を共有することだと考えています。山の楽しみ方は個人によってその捉え方が多岐に渡りますが、山には高山植物があり、野鳥や動物

との出合を楽しむ「自然の中を歩く楽しみ方」塩の道、鯖街道、熊野古道、中仙道などの文化や歴史にちなんだ道。白馬岳の代馬(しろうま)や爺ヶ岳の種まき爺さんなど農作業の目安とされたものも多く、山は歴史・文化的な背景を持ちます。

また山岳宗教や山名の由来を思いながら歩く「文化としての登山の楽しみ方」劔岳、穂高岳、槍ヶ岳などの厳しさに憧れその憧れに突き動かされて歩く「未知への憧れ登山」など多様です。第Ⅱ期登山学校はこうした総合科学(自然科学、人文科学、社会科学)を楽しむ余裕を持つことももう一つの目標としたいと考えています。

東海支部登山学校は公益社団法人が求められる「社会全般の利益、不特定多数の利益」を念頭に教育・スポーツを通じて国民の心身の健全な発達に寄与し、豊かな人間性を涵養することを目的とした事業であることを強く意識して運営にあたります。

最後にこの場を借りて登山学校運営にあたり東海支部の皆さま、講師の方々のご協力ご支援とご指導を賜りますようお願いを申し上げます。

日本山岳会東海支部 登山学校第Ⅱ期概要

名称：公益社団法人日本山岳会東海支部登山学校

主催：公益社団法人日本山岳会東海支部

目的：

1. 自立登山者の育成
2. 未組織登山者への安全の啓蒙と指導
3. 日本山岳会への会員入会促進
4. 東海支部の人材育成と事業の活性化

校長：高橋玲司（東海支部長）

運営：登山学校運営委員会

内容：

- ①7月をスタートとする1ヶ年。月1回の山行と年数回の座学を基本とする。
- ②始業式とオリエンテーション7月7日(土) 記念講演「近代日本登山史」—文明開化とともに— 講師 元JAC会長 尾上 昇

③グレードを3つに分ける。

I 初級 これから山を始めたいという人を対象。登山の基礎を学ぶ。



初級クラス: 今期の活動から「藤原岳」

II 中級 登山の経験はあるが、体系的に登山を学びたい人。夏山縦走、テント泊や小屋泊まり、雪中歩行等を目指す。



中級クラス: 今期の活動から「藤原岳」

III 上級 ある程度の経験者でさらなる登山技術のステップアップを求める人。初歩の冬山技術、簡単な岩登り技術の習得。



上級クラス: 今期の活動から「伊吹山」

④ 1 教室当たりクラス担任(リーダー) 1 名、副担任(サブリーダー)、補助要員数名を置く。受講生は、5~6 名。

⑤ 受講生は、全員支部友会に籍を置く。

⑥ 受講生の年齢制限を 65 才までとする。

⑦ 受講料

(1) 支部員 9,000 円

(2) 支部友会員 10,000 円

(内、支部費 3,000 円、支部友会費 4,000 円含む)

(3) 新規受講者 12,000 円

(内、支部友会費 4,000 円含む)

登山学校運営委員会平成30年度の体制

学校長 : 高橋玲司

委員長 : 榊 将美 (総括)

副委員長 : 石田伸郎 (登山教室
初級クラス)

副委員長 : 服田康宏 (中級クラス)

副委員長 : 今津英一朗 (事務局長
委員会運営 備品管理)

初級クラス主任 : 石田伸郎

中級クラス主任 : 服田康宏

上級クラス主任 : 星 一男

事務局

事務局長 : 今津英一朗

会計 : 水野由美

受講生管理 : 奥野明美

講習進捗管理 : 奥野明美

議事録(報告書) : 水野由美

資料編集 : 飯島実千代

備品管理 : 蟹井れい子



合同講座: 今期の活動から座学: 「装備一般」於ルーム

学生強化プロジェクト 『プロジェクトK』実施にあたり

支部長 高橋玲司

平成29年春の東海学生山岳連盟の総会で挨拶を行い、ある衝撃を受けた。

学生に『冬山に行ったことがある者』と問いかけたところ、経験者は50名の学生の中で1名のみであり、何とも危機的的回答であった。

昭和44年に設立された東海学生山岳連盟であるが、平成10年頃大学山岳部の衰退と部員現象で自然消滅をし、8年前に南山大学山田利之君、三重大学井上正隆君らを中心に再設立にこぎつけ、現在(愛知学院山岳部、名古屋大学WV部、名古屋工業大学山岳同人鶴、南山大学アルパインクラブ、岐阜大学山岳部、WV、岐阜医療科学大学山岳部、三重大学WV、大同大学アウトドアクラブ)個人加盟等も含めて9大学10クラブ80名ほどで構成されている。一昨年前からは東海学生山岳連盟を東海支部(青年部)の傘下に組み入れ、青年部とともに向上していけるように考えたが、青年部自体も学生の指導が出来るような体制もなく、知らぬ間に指導の空白が出来てしまっていたのも原因だ。

現在、東海支部として登山学校の開校や自然保護、ボランティアなど多種多様な取り組みで『山』のすそ野を広げる取り組みを行っているが、私が支部長として掲げたトリプルワンの目標『安全第一、一体感を持つ、NO1を目指す』の中で、本来東海支部の設立時からの根幹である、ヒマラヤ登山を主とする世界のNO1を目指す取り組みの実践がきちんと行われていないのが現実だ。登山はスポーツである。次世代の世界的な登山を目指せる若者を輩出する事は魅力あるスポーツとして大変重要な事であり、今、東海学生山岳連盟の若き学生に冬山をはじめとする大学山岳部的総合登山を教えなければその灯も消えてしまうと感じている。

冬山へ行くぞ!との問いかけに18歳からの若き学生7名が名乗りを上げてきた。このメンバーを中心に最終目標を冬の笠ヶ岳とし、『プロジェクトK』として始動した。目標はきれいな山登りばかりではない。泥臭い原始的な大学山岳部的な山登りを復活させ、きちんと

したアルパインクライミングの出来る学生を育て、東海支部の次世代となるよう育てていく事と考えている。



指導に関しては、東海学生山岳連盟理事で過去に連盟委員長を経験し、ヒマラヤなど海外経験もある卒業生の野崎雅之君、高山智之君、鎌倉源助君と今年度めでたく卒業する小澤祐介君の強力な体制で指導を行っている。毎週のようにルームで熱心に打ち合わせて、3月に行う笠ヶ岳に向け準備中でもある。

学生自ら考え自ら行動をさせており、時としてその判断ミスから様々なトラブルもありますが、指導陣を中心にフォローを行い、さらに考え実践している。

東海地区から発信する日本の学生登山の構築と支部の将来の人材育成事業でもあると考えています。私もそうであったように、先輩から育成される、そんな学生を一人でも多く輩出したい、そんな思いである。

また教育費の高騰や経済の低迷などがあり、今の学生は金銭的にも決して楽ではない現状もあり、装備は、皆さんから寄贈いただいた装備でまかないました。学生たちは一つ一つの装備に一喜一憂し使っており大変助っています。本当にありがとうございました。

主な活動(予定)

- 11/25~26 西穂高にて雪上訓練
- 12/2~3 藤原~御在所縦走
- 12/16~17 南八ヶ岳周回
- 12/23~24 木曾駒上松尾根
- 1/20~21 日本山岳会雪上講習会(梅池)
- 2/4~5 霊仙山周回
- 2/10 御池山
- 2/17~18 大日ヶ岳ラッセルトレーニング
- 2/21~27 大日ヶ岳~野伏ヶ岳ラッセル縦走
- 3/9~16 国立登山研修所冬山研修
- 3/23~25 笠ヶ岳合宿

Canada Northan Cariboo 山群スキー縦走 2018

青年部 菊池 徳

1. 隊の概要

隊長：菊池 徳 (28) 食料、装備担当
隊員：秋山裕司 (43) 現地調査、装備担当
隊員：谷 剛士 (38) ルート計画、装備担当
隊員：星野千春 (34) 日本国内で装備・食料
調達の調達、運搬

2. 日程

2018年4月12日～14日 現地にて出発準備
4月15日 CanmoreからValemountへ移動
4月16日～29日 (14日間) ヘリで氷河上に移動
し、McBrideに下山予定
4月30日 ValemountからCanmoreに移動
到着後解散

3. 目的

本計画で縦走予定のノーザンカリブー山群は、カナダのバンクーバーから北東に500Kmに位置し、ブリティッシュ・コロンビア州の東部、カナディアンロッキー山脈の主脈の西側に並行して横たわるカリブー山脈の北部の総称である。主脈に比べ標高は低いが、サー・ウルフリッド・ロリア山は3581mあり、氷河が発達している。また、州立公園内のウェルズ・グレーおよびボウロン湖は、バンクーバーに向かうフレーザー川の源流部にある。

ノーザンカリブー山群に横たわる氷河を南から北へ総行程140Kmを14日間かけたスキー縦走する計画である。成功させるためには、14Km・登り840m/1日の行程となり、天候を考慮すると、かなり難易度が高い。

メンバーの秋山・谷は、昨年同期に同山群の南に位置するサウザンカリブー山群の縦走に成功している。

尚、本計画は、日本山岳会東海支部の海外登山基金から20万円の提供を受けている。



サウザンカリブー山群



計画ルート図



平成30年新年懇親会報告

総務委員長 毛利邦男

恒例の新年懇親会が参加者合計75名(講演会のみ5名)を得て1月20日(土)16時からウイールあいち(愛知県女性総合センター)で開催された。



八木原会長(左)と安藤会長(右)

高橋支部長からの年頭の挨拶のあと来賓としてお越し願った日本山岳・スポーツクライミング協会会長の八木原罔明氏と愛知県岳連会長安藤武典氏からご挨拶を頂戴した。

講演会

今年は日本山岳・クライミング協会会長の八木原罔明氏を講師にお招きし『群馬のヒマラヤ登山』と題して群馬のヒマラヤ登山の歴史につき映像を交えながら詳しく講演して頂いた。



八木原氏の講演

皆様ご承知の通り、八木原氏は、冬期アンナプルナ南壁、冬期エベレスト南壁を初登攀に導くなど、世界屈指のヒマラヤ登山家として知られている。群馬県山岳連盟理事長など、登山界の要職を歴任、2015年から日本山岳協会の会長職を務めるなど日本登山界の大御所としても知られる。

氏は1975年 ダウラギリIV峰(7611m)、1981

年カンチェンジュンガ西峰(8505m)登頂の後、1985年『植村直己物語』撮影隊長としてエベレストに登り、テレビクルーの撮影をサポート



高橋支部長

トしつつ自らも南東稜登頂を果たすという離れ業をやったのけた。1984年のアンナプルナ(8091m)、1991年のサガルマータ南西壁、1993年チョ・オユー(8021m)、エベレスト南西壁(8848m)など、数々の8000m峰登山隊の隊長を務められたことから、それらの登山について裏話も交えて詳しくお話を頂いた。また、2003年と2008年にはイエティ(雪男)捜索隊に加わり、ダウラギリ山群を探検しイエティ発見を目指したとのお話を頂いた。

懇親会

講演会終了後は、B1階のCLOVER CAFÉにおいて懇親会に移った。片岡副支部長の発声による乾杯の後、来賓の八木原罔明氏、安藤武典氏も交え和気あいあいの雰囲気の中、会場は大いに盛り上がった。又今年は広島支部から送られてきた広島の銘酒「加茂鶴」も振る舞われた。

最後は、佐野副支部長の一本締めでお開きとなった。



左から尾上、小川(務)、八木原、安藤、小川(義)、高松

委員会 4 番目の支援登山となる 「身柄付補導委託登山」について

ボランティア委員会委員長 前田隆久

今年のボランティア委員会の活動は、従来の活動(知的障がい者支援登山、視覚障がい者支援登山、幼稚園児支援登山)に加えて、新しい支援登山を検討進めています。

「身柄付補導委託登山」と言って、名古屋家庭裁判所、名古屋家庭裁判所友の会と協力し、試験観察中の少年に、家裁調査官と共に1泊2日で登山体験をさせるという試みです。補導委託とは、非行のあった少年(14歳以上20歳未満)を、最終的な処分前の試験観察期間中に、民間に預け仕事や通学をさせながら生活指導をしてもらうという家庭裁判所の制度です。今回は短期間ではありますが、登山体験を通して、彼らに何かを気付かせ、立ち直りのきっかけになればという思いで協力することを決めました。

自然の中での1泊の共同体験と、翌日の登山体験は、日頃そのような機会の少ない彼らにとっても貴重な経験であり、立ち直りのきっかけとなる山からの得る力を信じています。

今回と同じ活動は、日本山岳会宮崎支部でも以前から行っている活動ですし、また、全国では、登山ではないのですが、アウトドア活動としていろいろと行われています。今回は、ボランティア委員会にこの活動に深い理解と、つながりのあるメンバーがいて、短期間で実現までこぎつけました。計画では、朝明茶屋に宿泊。夜は、登山に同行する支部員と一緒に夕食を飯盒炊きでBBQ。キャンプファイヤーを楽しみます。翌日は、朝明から根の平峠～水晶岳～中岳～金山～羽鳥峠～朝明の周回登山を予定しています。3月27日には、判事、家裁調査官、書記官、事務官の方々と宿泊施設、登山コースの一部に行って来ました。今年の春、秋には本番を実行する予定です。

当面、手探りですが、委員会活動の4番目の柱に育てていきたいと考えています。東海支部としても、ご協力をよろしく願います。

東海支部報では個人情報適切に管理し、下記利用目的以外には使用しません。

個人情報の利用目的

公益社団法人日本山岳会東海支部(以下本支部と称す)は、本支部の会員の皆様の個人情報を、以下の本支部(1)の事業において、以下の(2)の利用目的に必要な範囲内で利用いたします。尚、提供された個人情報は適切に管理し、これ以外の目的には使用しません。

(1) 本支部の事業

- ① 登山に関する指導ならびに研究
- ② 登山事故防止に関する啓発
- ③ 国内及び海外登山の企画及び実施
- ④ 支部機関誌「東海支部報」「東海山岳」及びその他の図書の発行
- ⑤ 目的を同じくする他の団体との連絡及び協力
- ⑥ 自然保護活動の推進
- ⑦ その他本支部の目的達成に必要な事業

(2) 利用目的

- ① 支部機関誌など、各種郵便物を送付するため
- ② 登山届提出のため
- ③ 緊急時の連絡のため
- ④ 支部主催の行事の案内のため

公益社団法人 日本山岳会 東海支部

東海岳人列伝(9)

～マカルーの見える丘に散骨された原 真～

編集委員会 西山秀夫

日本山岳会東海支部は1961年に設立された。原 真の父親は開業医として成功。長男として医師を目指す。実弟の原 武も名大医学部に入り、兄以上の山好きで、名古屋山岳会に所属。昭和36(1961)年4月の鹿島槍ヶ岳北壁を登攀中、雪崩で遭難。メンバーは故加藤幸彦、故鈴木重彦と石原国利ら7人。原 真も駆けつける。これが契機となり、原 真が発足間もない東海支部に加わることになる。

原真は支部の中心としてたちまち頭角を現す。色々曲折を経て、その9年後の1970年にマカルー遠征隊を成功させた。立役者は原 真に異論はないはずだが、現在も支部を継承する古参会員らは必ずしも、全面的に功績を認めない。

『遙かなる未踏の尾根MAKALU1970』の後半の座談会の項目に”東海支部の将来”の中で東海支部解散論が話題になっている。この点が今もわだかまりの解けない問題を孕んだ発言と見られる。原 真は機能的組織論者だった。機能体とは、外的な目的を達成することを目的とした組織の意味。原 真が嫌ったのは発足時はヒマラヤをはじめとする海外遠征に特化した機能体組織たる東海支部の共同体化だった。『快樂登山のすすめ』(東京新聞)の中で日本山岳会解散論も提言。事実、東海支部を解散する手続きに入っていた。これを察知し解散を阻止したのが故中世古隆司、湯浅道男や尾上昇らだった。

組織運営の行き違いから原 真は支部を去り、高所登山研究所を創立し独自のスタイルで速攻登山に取り組む。成果を山岳雑誌への寄稿や著書で発表して知名度を上げた。当時、中世古隆司に「なぜ、アルパインスタイルと

か速攻登山が持てるのか」と愚問を發したら、即座に「あれは初登頂や初登攀がないだろ」と言われた。価値観の違いは歴然としていた。

原はヒマラヤ至上主義である。藤内壁で若いガイドに「私はヒマラヤにはまったく興味がありません」と言われた。「君はヒマラヤへ行ったことがあるかね」と問う。「ありません」「ないのにどうして興味がないと言えるのだ」「興味がないからヒマラヤへ行かないんです」と答えると、「ヒマラヤに興味がないだと。嘘をつけ。お前はヒマラヤが怖いのだよ。だから興味がないと虚勢をはっているんだ」「私は6級の岩に命を懸けている。原さんはヒマラヤに興味を持っている。それでいいじゃないですか。私の言っているのは事実です。」(「山と溪谷」NO563の「青春は浅まし」から)ヒマラヤ登山だけを至高とする偏狭さは否めない。

2009年3月20日に死去。「マカルーの見える場所に散骨して欲しい」と遺言したという。2014年5月に彼を知る山仲間が集まったのはネパールのナムチェバザールだった。原 真が愛したシャンボチェの丘に妻のエリザベスさんが散骨した。前出の本の中で、「山の歌を考える」という論考がある。日本の登山家はどういうわけか合唱できない、と辛口批評。これに応えたのか、慰霊の人らは、シャンボチェの丘(3650m)で「ふるさと」を合唱し、故人の遺志に報いた。僻遠の異国の丘に集う山の仲間こそ原 真の遺産であった。マカルーに殉じた人生であった。

原 真の死去が新聞で報じられたのは1か



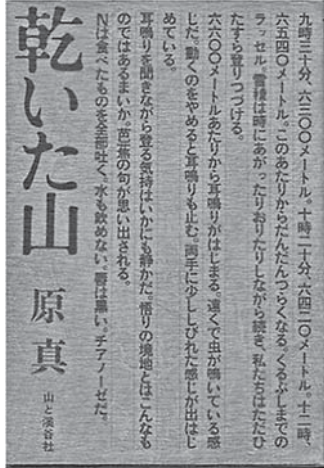
原 真氏



月後だった。支部報でも追悼文を提案したが誰も書く人が居なかった。そこで元支部員でマカルー隊員の朝日新聞記者が書いた。亡くなくても恩讐を越えることは出来なかったのである。

『乾いた山』に見る原真の登山の実録、こ

の本は絶版になっていた。以前から古書店で探していた。なぜなら、この本に私が所属する東海白樺山岳会の大先輩の永田良治氏が出てくると聞いていた。3年前か、東京・神田の古書店で見つけた。1000円だった。東海



白樺は親睦団体でしかなく、アルピニズムの実践者もなく、良い指導者もない中で自力で力をつけると日本山岳会東海支部に転じた。当時、支部を采配していた原真氏の下で1976年「コルジェニフスカヤ峰」7105mに登った。私が後に知ることになった小川繁氏とともにパーティを組んだ。読むと大変な登山だった様子が書かれている。シェルパレス、とか言っていた。迫真の描写である。この一節を書き出そう。

「我々はみな多かれ少なかれ目的の固定化によって、頂上へ向かって歩き続ける。歩いては止まり、止まってはまた歩く。立ち止まったときにはただひたすら呼吸をする。よくのどの粘膜が破れないと思う。頂上は目前に迫っているのに歩調はますます遅くなる。この苦行に満ちた単純作業は、忍耐でもあり、悟りでもあり、精神障害でもある。」

単なる写生的描写ではなく、哲学的な思考作業を経て紡ぎだされた文章であろう。精神障害と書くところが医師らしい。原真氏はよく文章をものにした。山の雑誌にも寄稿した。

2016年出版された『インド・ヒマラヤ』は東海支部の大きな成果である。しかし、筆者が役員会で見聞したことを書いておく。

当時インドヒマラヤ遠征を引っ張っていた

鈴木常夫遠征隊長に「お前らなあ、もうそんな遠征は恥ずかしいから止めとけ」と偉そうに大きな態度で叫んだ人がいた。それが原真を信奉していた故小川繁氏である。酸素吸いまくり、荷物は歩荷任せ、自分たちは登山にのみ集中する大名登山の実態に東海支部の伝統たるアルピニズムの実践に危惧を感じたのであろう。鈴木氏にしてみれば「今まで俺たちは人の世話ばかりしてきたじゃんねえ、50歳を超えたこれからは好きなようにやりたいじゃん」、中年のハンディは「おカネで買えるものは買う」と、小川氏の主張するアルピニズムの理想とのずれがあった。小川氏の考えは何でも自力で克服しようとする原真そのものであろう。

『乾いた山』は原真の真骨頂がよく分かる原典といえる。41歳の時の著作。

「ヒマラヤ登山は人間の仮面をはがし、その弱点を白日のもとにさらす。日本の山登りでは予想も出来なかった人間のあさましさが、ヒマラヤという過酷な条件のもとではじめてわかる」この考えを中高年主体のインドヒマラヤ遠征に適用したら死人がでるだろう。

原真の文はマカルーを原点として、その後実践で得た見聞を追記して、一書をものにした。変わらざる考えは10年後の著書「頂上の旗」に再録している。言わば牛の反芻にも似て思索と実践を繰り返していったのだ。

東海支部の中にいると生々しい批判も聞えてくる。彼自身、東海支部のみならず本部の批判、先達への批判は舌鋒鋭い。しかし、これだけ登山の実践と発信をできた東海支部に縁のある登山家もまた居ない。そこが魅力として信奉するファンが今もいることを付け加えておきたい。

著作歴

乾いた山(1977)、中央アジアの高峰：パミール速攻日本山岳会隊の記録(1977)、登山のルネサンス(1982)、ヒマラヤ研究(1983)、ドキュメント速攻登山：それぞれのシジャパンマ峰8012m'82(1984)、頂上の旗一生と死のあるところ(1988)、還らざる者たち(1992)、ヒマラヤサバイバル登山戦略論(1994)、快樂登山のすすめ(1997)、他雑誌『山の本』等に寄稿

わが山登りと東海支部 その2

元・常務委員(支部報担当) 安藤忠夫

東海支部の事務局を手伝うようになったのは日本山岳会に入会して10年ほど経ってからのことで、『名古屋からの山なみ』(初版1991年6月、中日新聞社・刊)の編集を担当することになった時である。それまで先頭になって準備をされていた沖 允人さんが足利市に転居されることになり、急遽、駆り出されてしまった。

右も左も分からない若造だったこともあって、古参会員からの戒めや、助言と激励を受けながら必死になって取り組んだ。本の編集などは素人同然なのだからなおさらだった。

そんな編集作業での、失敗談やら心労話、苦心談の1つ、2つを記しておく。

この本のうたい文句は、名古屋の東山スカイタワーから望める、山々への讃歌、山岳展望だった。ところが、はじめに執筆者を募って選定した山ばかりか、愛知県内とその近辺の山ならばまだしも、遠くて展望できない山の、富士山や、南アルプスの甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳・北岳・塩見岳・光岳、北アルプスでは黒部五郎岳・槍ヶ岳・奥穂高岳・焼岳などの原稿が、突然に送り付けられてきた。送り返すことなどもってのほか。重複した山もあったりして、收拾が付かなくなってしまった。

で、やむなく編集終了間際に、言い訳のつもりで「名古屋から見える山、見えない山」と題して、あらたに作文をすることにした。中に「富士山、そして南アルプス、北アルプス」の一項をもうけて、富士山や、南・北アルプスの山の多くが見えないことにも触れた。が、ここで使った計算式とその数値に自信がもてなかったので、当時、山岳展望の権威者と目されていた日本山岳展望研究会の田代 博さんを横須賀市の勤め先をお訊ねして、校閲を願い出た。

この「名古屋から見える山、見えない山」は、苦し紛れに記したものながら、中日新聞社の担当者からは「すごい研究論文ですね」と、えらく褒められてしまった。実際には、



たいしたことを記したわけではないのだけれど。

もう一つ、1994年11月発行の改訂版の巻頭に挿入した見開き2頁の、展望図の作成である。もともとこの種の作業は苦手なのだが、誰も引き受けてくれなかった。

タワーは配水塔として造られたもので、所有する名古屋市から協力を取り付けていた。前日に連絡すれば時間を問わず、無料で展望台に上れた。ところが、天気予報を聞いて駆け付けても、思い通りに展望がきかない。よしんば展望が得られたとしても、120°程度が得られれば上出来である。目的の山の方角には雲がかかっていて、山岳展望ができないことが多く、いつまで経っても思い通りに仕事が進まない。で、2、3日を展望台で寝泊まりしたこともあった。得てしてそんな日の朝は、濃いガスが立ちこめてしまって、どうにもならないものである。

結局、いくらか西にずれるが、中電本社ビルの最上階に、支部員の大坪重遠さんが監査役として常駐されていて「毎日暇だから、遠くの山並みを観るのが日課だ」と言って憚らない人だったことを思い出した。おそろおそろ依頼してみたところ、たちどころに目的の展望写真を届けてもらえた。で、どうにか展望図の完成までこぎつけることができた。

挿入した写真についても、ついでに触れておく。素人ながら、私が撮った写真を50枚ほど入れた。執筆者からの提供がなかったり、見栄えしないものだったりしたためだった。一方で、中日新聞社からは、ヘリコプターを飛ばして該当の山の空撮をしたい、と言ってきた。そして、搭乗してほしいとまで言う。が、これは飛行する日を事前に決めておくことができず断念したが、撮影場所を指定して、数枚の空撮写真の提供を受けることができた。

さらに初版にはさみ込んだ「発刊に寄せて」と題する葉には、日本山岳会会長 山田二郎、30周年記念事業実行委員長 尾上 昇、愛知県知事 鈴木礼治、名古屋市長 西尾武喜、の四方の推薦文が載せられている。そのうちのいくつかについてである。

本書の出版当時、東海支部の支部長は湯浅道男さんだった。編集が大詰めに差し掛かった時、支部の役員会で、「橋本龍太郎(衆議院議員、東海支部の特別顧問)、県知事、名古屋市長の推薦文も載せた方がいい」という意見が出た。それを受けて会議終了後、湯浅さんが「適当に推薦文を書いてほしい。あとで、了解を取っておくから」と言い放たれるのである。

断ることなどできそうにない。私は危ぶみながらも、素人ゴーストライターよろしく、四苦八苦しながら作文をした。それぞれの人の立場に思いを馳せて、忖度し、オモンバカッて(?)、何に触れたならば本人が書いたものらしくなるかを少ない智恵をふり絞って考えた。数日が過ぎ、湯浅さんにそれを渡した。結果、橋本龍太郎のものは、独特の言い回しがあるからと云うことで、ある程度の書き直しがあった。が、他の2つは一字一句訂正することなく戻ってきた。で、書き直しがあった橋本龍太郎の「発刊を祝う」と題したものは、本体の目次の後に入れ、ほかの2人のものは、栞に掲載しておいた。

私の立場からすれば自作自演である。未だにこの栞を見るたびに、冷や汗が出て、後味の悪い思いがする。ともかくも、訂正のなかった推薦文らしきものの1つをここに披露する。当時、本の具体的な内容が、外部の人ばかりか、支部の上層部の人にも詳しく公表していない時だったから、私が代筆したことを理解していただけるはずである。

時宜を得た企画を楽しむ

愛知県知事 鈴木礼治

「毎年、伊吹嵐が吹くころともなると、濃尾平野からは遙か遠くに白雪をいただいた山々が見えるようになります。誠にすがすがしい思いに浸ることができる一時で、その光景に接した日は何となく生気に満ちた気分で公務に励むことができます。山岳風景というのは、それを眺めているだけで人に安らぎを与えてくれるものだ、とつくづく感じているものです。

実は、私は役目から上京する機会が多いわけですが、東京からは富士山が見える、と東京人たちが誇らかに語ることがあります。ところが、わが愛知からも名山の誉れ高い御嶽山や白山が見えるではないか、とひそかに思っていたものです。ことに御嶽山は、昭和36年に完成した

本県の誇る愛知用水の水源の山です。御嶽山の真っ白く雪をまとった山容を見るたびに、今年も水甕は安泰だと思いつらぬのが常です。

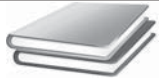
この濃尾平野は関東平野についてわが国第二の広さを誇る沃野ですが、平野のどこからでも多くの山々が見られるわけです。わが郷土からも、こんなにたくさんの山が眺められることを世に吹聴したかったのであります。ところが私には詳しい山の様子に分からず、何という名の山なのか今一つ自信が持てませんでした。いつかその一つ一つの山々を正確に知っておきたいものだと願っていました。

今回、図らずも日本山岳会東海支部のみなさんが支部創設30周年を記念して『名古屋からの山なみ』という本を上梓されました。名古屋市内から見た山の大展望がテーマで、時宜を得た企画と言えるものです。お祝辞を草するにあたって、一読させていただきました。さすがに一流の登山家によって記されたものだ。掲載された紀行や随想はどれも味わい深い名文ばかりだと感心したり、登山にまつわる話がこんなにも興味の尽きないものかと思いました。

そればかりか、本県の三河山間部には鳳来寺山をはじめ、明神山、宇連山、碁盤石山、段戸山などの県民が誇りとしている山がありますが、これらの山々についても地元の山ということで、特別に多く掲載されています。また、愛知県の最高峰は茶臼山ですが、名古屋の東山スカイタワーからも眺められると記されています。しかも、県庁付近からでも大丈夫とのことなので、それを確かめることを楽しみにしています。」

この代筆のことなどは既に時効になっていることなので、本づくりの笑えぬ裏話として一筆したためた次第。

ともあれ秋口になり、編集の最後の仕事として、新聞社に乗り込んでいって、青校と称する徹夜の校正を終え、どうにか役目を終えることができた。この時の達成感と言うに云われぬものがあつた。さらに、発行後には、東海テレビからインタビュー番組製作の依頼があつた。当然ながら、テレビ出演は初めてである。私一人だけでは間がもてず、心許なく、自信がない。で、長老の一人、上田 正さんに協力をお願いして、無事責をはたすことができた。



東海支部の蔵書からの一冊⑮

図書委員会委員長 石田文男

『ヒマラヤの高峰』（深田久弥著）

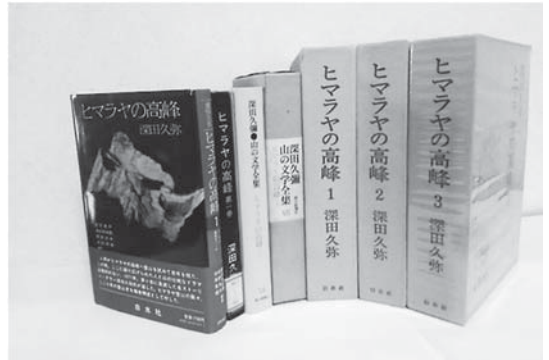
（ネパールの開国以後、・・・ヒマラヤはほぼその全域があきらかにされてきた。未知の谷も未踏の山々も、たびかさなる踏査と登攀によって徐々に解明されてきたわけである。この世界的な動向のなかで、深田久弥はその情勢把握に寧日なきありさまであったように思われる。雪華社版「ヒマラヤの高峰」をまとめるにあたって、《原稿をほっぽらかして、私のヒマラヤ放蕩が始まる。ああしかし、そんな楽しみがなかったら、わたしのような怠け者が、どうしてこんな辛気くさい仕事に恥じるものか》と書いたことがあったが、彼のいう《緊張》のなかには大きな楽しみが共存していたのである。それにしても見事な放蕩というほかない。その放蕩が登山と探検を志す若者たちにヒマラヤ熱をふきこんできたことは事実である。彼は研究者、祖述者であったばかりでなく、ヒマラヤの煽動者であった。

この点、ヒマラヤの高峰の果たした役割は絶大なものであった。・・・数年もたたぬうちに民間団体や小登山隊が成果をあげ始めたのは、深田のヒマラヤ記事による煽動があったからにほかならない。）—これは『深田久弥・山の文学全集Ⅸ』（ヒマラヤの高峰・下）の解題の冒頭の一節だが、少し長いが私の代弁として引いてみた。

深田久弥の山に関するものなかでは『日本百名山』、十余冊におよぶ山岳紀行文集とならんで『ヒマラヤの高峰』（全5巻）が高く評価されることにだれしも異論がないであろう、と言われている。

その『ヒマラヤの高峰』は次のようにして生みだされるのだが、作家だとはいえ何度読み返してもその全てに圧倒されるものだ。

『岳人』にヒマラヤの話を書き始めたのは、1953年イギリス隊がエヴェレストに初登頂する少し前のこと。〈それ以来12年間、殆んど毎月・・・書き続けた。「ヒマラヤ机上小話」（26回連載）。ひき続き「7000メートルの山々」（23回）「ヒマラヤの高峰」を67回書き、なお長く将来に及ぼうと・・・。その間にヒマラ



ヤに関するもの4冊(内2は翻訳)を出し、ヒマラヤへも出かけた。ヒマラヤに関する私の努力・・・、傾倒を知って貰う。・・・この仕事に私は自負するところが・・・文献の渉猟と精読と、・・・15年間の根気が必要であった」と。

これらを纏めて上梓されたのがこの大著だ。最終的に136座を書いている。ちなみに、1950年のフランス隊アンナプルナ「初の8000メートル登頂」のから最後の8000ゴザインタンまでの15年間、〈・・・ヒマラヤ登山史で最も輝かしい時代であった。その期間ヒマラヤに憑かれていたのは、私の幸福であった〉と述懐している。なお、本書の大半を原典から読み執筆、訳書があっても引用はせず自分で訳しているのだ。

これらに秘められている136座の山々は、どこから読み始めても引き込まれていき結局はその終りまで読んでしまうのが常だ。

また、〈『・・・すでに、ヒマラヤの主要な地域にはある程度正確な地図が作られ、以前の登山隊の文献や写真も手軽に入手できる時代である。現代のヒマラヤ登山家は・・・。条件的にはきわめて恵まれた時代ではあるが、逆にまたたいへんな時代だとも言えよう。どれだけ満足できる登山をするかということが、登山家自身の内奥の意識によって決まってくるからである。しかし、登山というものをその原点に立ち返ってみると、・・・ヒマラヤ登山が登山本来のものに、より近づいたと考え・・・〉—これも長い引用になったが、白水社版(全5巻)の第5巻著者あとがきのもので

ある。変遷しつつあるヒマラヤ登山への姿勢を述べていて興味を引く。

いま、東海支部には青年部・学生連盟などの若手の活動がのびている。海外登山も行われている。特にこうした人達には是非とも、この『ヒマラヤの高峰』を読んで頂きたい。

「未来は過去の中にあり」、登山の記録・歴史を知ること自らの登山の視野と糧になるはずであるから。

ここで、増補・異本順に整理しておこう。

- ①雪華社版：61座収載(全5巻・写真集1巻)、発行1964年～1965年。
 - ②白水社版：136座収載(豪華版全3巻)、発行1973年。
 - ③朝日新聞社版：141座収載(深田久弥・山の文学全集12巻・写真集1巻のうち7～9巻)
 - ④白水社版：76座収載(全5巻)発行1983年
- ②の白水社版からは著者急逝後に編まれた

もので、それぞれに編者の「あとがき」と「解題」があり、その主旨がよく理解できて興味津々だ。たとえば、く・・・この決定版の3巻は・・・不朽の労作と言って過言ではない。

・・・将来日本のヒマラヤ登山やヒマラヤ研究を綜覧する場合、特別の意味がある。ヒマラヤを訪ねる登山者は一度は本書をひもとき、・・・われわれは日本人が書いたヒマラヤ文献の中で、本書こそ最も命の永いもののひとつであると信ずるゆえんである)と力説されている。

このうち支部の所蔵は雪華社版と②の白水社版、どちらも貸し出し禁止になっているが是非、手にされる事をお薦めする。

1973年6月25日発行 白水社
編集：望月達夫・諏訪多栄蔵・雁部貞夫
623～734頁 A5判

東海支部俳壇

山蕩児 心酔

冬富士

アイゼンの爪も立たせぬ蒼氷

◎蒼氷・昼夜の寒暖差と強い季節風が育む
猛烈に固い氷。

冬富士やツアツケの先やすり掛け

◎冬富士特有の蒼氷や突風に備えて
やすりを掛ける。

アイゼンをきしませ登る峰はるか

峰おおふレンズ雲朔風強し

◎レンズ雲・笠雲ともいい、季節風の強い
晴天の日に頂を覆う。◎朔風・北風。

冬富士や突風に耐へ四つん這い

雪深し馬もとどかぬ馬返し

◎馬返し・富士吉田口の二合目。
昔、馬でここまで行つた。

雪崩

逃げまどう雪煙迫る大雪崩

呆然と雪崩に浮沈の友を追ひ

秋空に天地ゆるがす岩なだれ

思ひわびうらめしきかな二輪草

西山秀夫

二月の奥美濃・坂内村

奥揖斐や山家をおおふ春の雪

風強くテント揺らぐや冴へ返る

春雪をこんもりと盛る蕎麦粒山

春雪の尾根に続きしわかん跡

春雪や落とし穴めく穴に落つ

春北風の折々に吹く雑木尾根

春日の降りそそぐ尾は南向き

雪庇な行きそ行きそ近寄らず

春寒や登山をすれば暖かし

黒津山を目前に敗退す

悔しさにまたかえり見し春雪嶺

カトマンズ駐在の記者 エリザベス・アン・ホーリー女史逝く

評議員 杉田 博

彼女の死が話題になるのは、ロイター通信のカトマンズ駐在として40年以上にも及ぶヒマラヤ登山と関わった長い記者生活を閉じたからだ。彼女自身は山に登らなかったが、何とんでも、彼女を有名人にしたのは、積み上げた取材記事に基づくクロニクラー Chronieler (年代記作者) と言うに値する実績を残したからに違いないだろう。その記事は完全で、正確な記録であったから、国際的にも岳界で尊敬されたのである。彼女の記録はネパール・ヒマラヤに向かう遠征隊の成否率をデータベースで手短かに述べられている。

杉田が彼女のインタビューを受けたのは、マナスル以来日本隊が定宿にしてきたカトマンズのインペリアルホテルに滞在していたおりのこと。1965年2月、ホテルの前庭では、ローツェに向かう早大隊、ゴジュンバカンに向かう明大隊の2隊の隊荷、出発準備でごった返していた。ダウラギリⅡ峰に向かう弊隊も米、小麦粉、香辛料など現地調達追加食糧の調達、荷造りに追われている最中であった。

53年前のことで記憶も薄らいでいるが、彼女のインタビューを受けるより前に、ロバーツのインタビューを受けたように覚えている。J・M・ロバーツの意見を聞くことが弊隊として重要な情報収集であった。

弊隊の問題の一つは、ベースキャンプの予定地ムクットガオンに北回りか、南回りかであった。そして、それらは輸送計画(輸送手段)と密接にからむ、成否に関わる課題であった。

ロバーツの意見も遠征隊の輸送作戦が重要な問題だろうが、何とか動物(ヤクやゾッキョ)の確保が可能だろうというものであった。この点については、

彼女からの指摘、意見、質問は無かった。1965年の段階では、未だポカラから→タコーラ→ドルポ地方に入る遠征隊は少なく、遠征実績が少なく、彼女の得意とするデータ集積が充分なかつ



たからでなかろうか。参考資料から彼女のプロフィールを紹介しておく。

Elizabeth Ann Howley (nov. 9. 1923(大正12年) - Jan. 26. 2018享年94才2ヶ月)

彼女はアメリカのジャーナリストでヒマラヤ遠征隊のクロニクラーであった。1959年2月にネパールに旅して、以来ネパールを離れることはなかった。

ホーリーはアメリカのイリノイ州シカゴに生まれミシガン大学に学んだ。ニューヨークのフォーチュン誌の研究員(リサーチャー)の職を投げ打ってネパールに渡った。そして世界一周の途次カトマンズを訪れた。

彼女はリポーターとして寸時の間仕事をしながらサンフランシスコを訪れている。また数年後、タイム(Time)のジャーナリストとしてネパールに戻った。

彼女は、山岳関係のニュースを報道するロイター通信(The Reuters news agency)の仕事を見つけた。それは、1963年のアメリカン・エベレストの初遠征の仕事であった。彼女の活動力はニックネーム『登山界のシャーロック・ホームズ』を得た。

(写真はインターネットより転載)



2004年ホーリー女史とメスナー氏

同好会紹介コーナー

スケッチクラブ 村中征也 第4回作品展—大勢の来館に感謝!!

第4回作品展を、2月28日(水)～3月4日(日)に名古屋市の「市政資料館」で開催しました。

15名29点の作品で、山の絵が半数、あとは1年間のスケッチ旅行での作品等です。ユニークで楽しい絵が揃いました。高橋支部長始め多くの支部員の皆さんに観て頂き、有難うございました。

昨年と同様、市政資料館を利用しました。「ウイユ愛知」の向かいにあり、旧高等裁判所の建物を活用しているので、少し不便ですが、廉価なものと茶菓の飲食が出来るので、来場者とお喋りを楽しめました。



第4回作品展の最終日 全クラブ員

スケッチクラブが出来て5年、作品展は4回を数えますが、良い作品を観て頂けるようになりました。上手・下手は描く側の心の持ち方次第だと思います。「明るく・楽しく・仲良く」がモットー、自然を身近に、クラブライフを楽しみたいと思います。

絵に興味をお持ちの方は多いのですが、敷居の高さを感じて一歩が踏み出せない方もいます。仲間が居るのが大切で、登山仲間だと動き易いものです。

スケッチクラブは、会費ゼロの気楽な同好会で、絵と山を合わせて楽しめます。春夏秋のスケッチ旅行は、支部員の方なら誰でも「試し参加」して頂けますので、気楽に声を掛けて下さい。代表：石田好子 事務局：村中征也・武内喜代子

古道塩の道同好会 山中光子
南箕輪町の半分を残し、飯田線北殿駅付近で

153号線を離れ、塩の井バス停車前から旧道に入る。箕輪町の有志の方々が「南箕輪いいとこめぐりの会」として要所に黄色の目立つ看板を建てている。旧道に入り暫くすると「生山葵分譲滝の澤園」と一枚板の看板の出ている立派な屋敷。地元の方に尋ねると、以前は活発だったが、先代が亡くなりご子息は跡を継ぐ気持ちが無いようで荒れ放題になっているとの事。もったいない限りの光景であった。

ワサビ田に別れをつけ、久保寺(きゅうほうじ)跡を通り、民家の前に南箕輪いいとこめぐりの会の黄色の看板で「旧伊那街道 中山道の脇往還 江戸時代の面影を残す」が建っている。地元の有志の方々のおかげで山肌にきれいに整備された道が旧街道で、秘密の道を見つけた時のような、わくわく感を楽しむ。その先は遊園地になり、馬頭観音像も建っている「清水の里(観音堂跡)」へ出る。ここは既に箕輪町。山肌の道を歩いている時に町境を超えていた。

その後、車の往來の激しい153号線に戻る。箕輪南宮神社を過ぎ、暫くは153号線を2ヶ所ほど鍵の手になっている所を楽しみ、追分に出る。追分は道標等、色々な石碑が建ち公園となって



モミの木旅館前。高橋神社参道

伊那街道(三州街道)と春日街道 交差点

いる。公園近くから細い旧道に入り、大出城跡を越え、153号線を渡り道なりに進む。この辺りは新しい住宅だが、突然「上村の辻」(わでむらのつじ)の看板が出てくる。火伏 疫病防止 村内の安全を願った辻。

道標「いせ道」を見て旧153号線に向かうと、旅館「もみの木」に出る。この道は大出高橋神社への参道との事。旅館の前のもみの木は箕輪町指定有形文化財となっている。今回は強風と時々舞飛ぶ雪に泣かされたが、終わってみると楽しい一日であった。

支部友コーナー

◆支部友委員会山行計画(平成30年5月～9月分)

5月20日(日) 鈴鹿の藤原岳(1,140m)
 ☆ リーダー: 今津英一朗 締切: 4月30日
 5月20日(日) 鈴鹿の国見岳(1,175m)
 ☆☆ リーダー: 村瀬恭平 締切: 4月30日
 5月26日(土) 野坂山地の赤坂山(823m)～
 寒風(851m)
 ☆☆ リーダー: 榊 将美 締切: 5月5日
 5月27日(日) 養老の養老山(859m)
 ☆ リーダー: 田中 進 締切: 5月7日

6月3日(土) 木曾山地の南木曾岳(1,677m)
 ☆☆ リーダー: 高松信治 締切: 5月12日
 6月24日(日) 越美山地の荒島岳(1,523m)
 ☆☆ リーダー: 村瀬恭平 締切: 5月27日
 6月30日(土)～7月1日(日)
 八ヶ岳の硫黄岳(2,760m), 天狗岳(2,646m)
 ☆☆ リーダー: 磯部 隆 締切: 6月10日

7月7日(土) 阿寺山地の白草山(1,641m)
 ☆☆ リーダー: 金谷正起 締切: 6月17日
 7月7日(土) 八ヶ岳の編笠山(2,524m)
 ☆☆ リーダー: 水野猛志 締切: 6月17日
 7月12日(木) 伊吹山地の伊吹山北尾根
 (1,337m)
 ☆☆ リーダー: 榊 将美 締切: 6月10日
 <夏山>7月20日(金)～22日(日)
 北アルプスの立山三山縦走
 (雄山(3,003m)～真砂岳～別山乗越)
 ☆☆ リーダー: 村瀬恭平 締切: 6月20日
 <夏山>7月27日(金)～28日(土)予備日29日
 南アルプスの甲斐駒ヶ岳(2,967m)
 ☆☆☆リーダー: 今津英一朗 締切: 7月7日

<夏山>8月3日(金)～5日(日)
 南アルプスの仙丈ヶ岳(3,033m)
 ☆☆☆ リーダー: 高松信治 締切: 7月7日
 <夏山>8月4日(土)～5日(日)
 中央アルプスの木曾駒ヶ岳(2,956m)
 ☆☆ リーダー: 磯部 隆 締切: 7月15日
 <夏山>8月11日(土)～12日(日)
 御岳山系の御岳山(3,067m)(小坂口ルート)
 ☆ リーダー: 村瀬恭平 締切: 7月15日
 <夏山>8月18日(土)～19日(日)
 両白山地の白山(2,702m)

☆☆ リーダー: 榊 将美 締切: 7月18日
 <夏山>8月31日(金)～9月2日(日)
 北アルプスの唐松岳(2696m)
 ～五竜岳(2814m)の縦走
 ☆☆ リーダー: 尾上 昇 締切: 8月10日

<夏山>9月7日(金)～9日(日)
 頸城山地の火打山～妙高山縦走
 ☆☆ リーダー: 磯部 隆 締切: 8月14日

次回支部友ミーティング 開催内容のお知らせ

- ① 第29回「山で死なない方法」～日帰り登山から2・3日泊り山行を例にして～
 4月10日(火)19:00～21:00 支部ルーム
 講師: 山田明美氏(東海支部副支部長)
- ② 第30回「夏山へのお誘い」
 2018オリエンテーション
 6月12日(火)19:00～21:00 支部ルーム
 講師: 夏山リーダー各氏

支部友会員数

平成30年2月末現在/131名

リーダー連絡先	
尾上 昇	FAX: 052-832-3878 メール: onoe@onoe.co.jp
榊 将美	携帯 090-7237-4410 メール: m.sakaki@minds-consulting.jp
金谷正起	携帯: 090-9931-3600 メール: kanaya.masaki@rouge.plala.or.jp
川北一博	携帯 090-3956-4123 メール: kawakitakazuhiro@outlook.com
村瀬恭平	携帯: 090-4186-9876 メール: hoshizakari@ezweb.ne.jp
田中 進	携帯: 090-9191-8666 メール: t-susumu@peace.ocn.ne.jp
今津英一朗	携帯 090-2616-7549 メール: imazu.eitirou@maroon.plala.or.jp
磯部 隆	携帯: 090-9180-7245 メール: takass@yk.commufa.jp
松本陽子	携帯: 090-7859-4031 メール: yo-kom@nifty.com
高松信治	携帯: 090-3156-5268 メール: takama2nobu3@yk.commufa.jp
水野猛志	携帯: 090-5866-3781 メール: r34668@bma.biglobe.ne.jp

- 山行対象者** 支部友会員及び支部会員
申込み方法 ・支部友会員は申込締切日までに、各山行リーダーが示す方法で申し込む。
 ・締切日 原則山行日 20 日前まで。(締切日を過ぎての参加空き情報はリーダーに直接問い合わせ下さい)
 ・支部会員は申し込み締切日の翌日以降に、各山行のリーダーへ問い合わせる。

- ・山行の募集人員を超えない範囲で、支部会員の参加申し込みを受け付ける。

個人山行も J A C 東海登山届けを！

専用携帯電話(担当 山田明美)

080 - 2632 - 3776

委員会報告

【自然保護委員会】

2017年度自然保護委員会の活動

- ・吉祥山、葦毛湿原の山行
 ～4名参加 10月31日
- ・森の勉強会・・・田原市の「泉福寺」と周辺の森。京滋支部、関西支部からの参加もあり。
 ～15名が参加 10月19、20日の1泊2日で実施

2018年度の予定

- ・環境省重要生態系監視地域モニタリング事業に参加の予定である。
 活動場所・・・猿投の森、ヤマザクラフィールド

調査動物と調査期間

カエル 11月より5月の2週間に1回

カヤネズミ 初夏と秋

哺乳類 5月より11月頃

- ・興味のある方は井藤までご連絡ください。
 090-5626-5936

自然保護委員長 井藤恵美子

【技術向上委員会】

技術向上委員会では 1 月から 3 月までに 3 回の講習会を開催しました。

「山の天気と気象の基本講座」1月6日

副題は「気象遭難を無くすために！」。70 枚のスライド資料を用意頂き、気象予報士であり、NPO 法人ウエザーフロンティア東海山岳部の小田切正氏から、丁寧な講演を頂いた。基本的な天気の仕組み、観天望気の説明。山の天気の特徴と遭難事例から見た山の天気。最後に天気情報の見方、集め方と山へ行く前に、気象情報を入手して安全登山に役立つアドバイスを受けた。

参加された皆さん！登山計画の折に大まかな気圧配置、持参する装備にも関係する寒暖や天候、山域の標高を気かけましょう。そして直前にもう一度、最新の情報を入手するようにしましょう。西穂独標の落雷事故は遭難事例と

して特に詳しく説明してもらった。季節を問わず山の雷は怖いですよ。注意しましょう。



気象講習会会場

「山の病気とケガ」 2月24、25日

参加者が山で役立つ医療知識の習得を目指して、野口いづみ氏に登壇頂いた。事故の未然防止の立場から「山登りトラブル回避&対処マニュアル」、「安全登山の基礎知識」(共著)、「山の救急医療ハンドブック」など多くの本を上梓されており、ご多忙にもかかわらず日夜、実践登山を続けられている日本山岳会医療委員会の委員長である。

当日の参加者に中高年齢者が多いとの判断か、捻挫予防や疲労軽減のマッサージやテーピング方法に時間を割かれたのは、全国各地で年間 40 回もの講演をされている経験者ならではの話の進め方。説明スライドや添付資料に写真や漫画イラストを多く入れられ、基本的な医療知識を初級者に理解できるよう説明頂いた。野口さん本人が虫に刺され腫れあがった患部写真や実際の遭難に遭遇した写真の数々は迫力があふれ、かつイラストは手作りのものだそうで解りやすく可愛く表現されていた。

翌日 25 日は鈴鹿入道ヶ岳で選抜リーダー実地医療講習をして頂いた。山中で行う講習企画は、天候や自然条件、参加者のレベル、ルート選定など実施可否のリスクが非常に高く二の

足を踏んでいましたが、ひたむきに山を登られてきた野口講師の協力を得て実施することができた。今回の実地講習会を検証したうえで、今後の講習会の可能性を図ります。

中級編「ファーストエイド」3月3日

登山中の突然死は循環器系機能障害が第一原因であること、とくに低体温症は致死系の不整脈を誘発し易く山中での直接的な死因につながることで、心肺蘇生の実技を含む講習会を開き、事故などの突発的アクシデントに備える必要性から開催に至りました。

この実施に際して名古屋市立大学病院のシミュレーションセンターの場所と機材の提供協力を受け、救急分野と心肺蘇生実技は、日本救急医学会の専門医である増田医師、日本登山医学会認定国際山岳看護師の浦川看護師、福島山岳看護師そして全体の運営と低体温症分野を日本登山医学会認定国際山岳医の三浦医師他多数の方々の協力と力添えを頂きました。

また愛知県山岳連盟にも共催の立場で参画してもらい、県内の山岳クラブや職域クラブ、近隣県の山岳関係者の参加、及び愛知県や三重県高校登山指導者の参加もありました。公益社団法人の支部として安全登山の推進は欠くことのできない課題であり、事故防止や遭難対策を共有できる山岳団体とも一緒に取り組んでいきたいと思えます。

技術向上委員会の今津さんの講習会紹介レポートが以下にありますので、ご覧ください。

選抜リーダー実地医療講習レポート

～野口いづみ氏懇親登山～

ユースクラブ 小林 智佐

2月25日野口いづみ氏と共に入道が岳を登りながら、怪我の予防について学んだり、持ち物を見せていただいたり、低体温について学びました。腰痛ベルトの効果的な巻き方、服の上からできるテーピング、特に低体温の予防や、なってしまった時の対応などはとても勉強になりました。

濡れや風や疲れが低体温の原因になりうること、ウールの手袋や温かい飲み物がとても効果的であることなどなんとなくは理解していてもしっかりと知識があるのとないのではリスクの大きさがとても変わってくるように思います。今までは怪我の予防は頭の片隅におきながら登っていましたが、低体温は意識していなかったため、自分も気をつけなくては

ならないし、一緒に登っている方々も大丈夫であるか、確認が必要であると感じました野口氏の持ち物も、見たことないものが多々あり、時代とともに医療関連品も進化しているものもあれば変わらないものもあり、その情報を知ることが大事であり、行く山によりどれを選択してもっていくのがとても大事になると思います。今回はそれを知り使い方を知り、安全登山に繋がるとても貴重な体験をさせていただきました。この知識を生かせるような登山をしていきたいと思いました。



入道ヶ岳頂上で野口講師の話を書く参加者

ファーストエイド講習レポート

技術向上委員会 今津 英一郎

このたびは支部員三浦先生の多大なご協力により、人体モデル人形や訓練用AEDを使った、体験型心肺蘇生訓練の機会を作ることができた。心肺蘇生訓練の講師は、現役救急部門医師である江南厚生病院の増田和彦先生に、また、三浦先生からは低体温症救命救助に関する講習をいただいた。

心肺蘇生訓練ではDVDを見ながら、実際の要救助者を発見する段階から、チームワークによる救助の流れを理解した。低体温症の講習では、低体温症に限り、蘇生に時間が掛かっても蘇生の可能性が残されることを、実際の症例を交えた話を伺う。また、症状対応の中で手足に溜まった冷たい血流は心臓へ戻り致命傷になることがあるため、むやみに摩るより、心臓付近をプラティパスに湯を入れ温めることが優先されることを習った。この講習では、他では聞けない話を聞くことが出来、実際の山中でも有効活用可能な、より実践的な技術の習得をすることができた。今後の安全山行に大変役立つ内容のものと考えている。

[山行委員会] 平成29年度 支部山行実施報告

		山行委員会				
No.	月	実施日	レベル	山 行 名	参加者数	リーダー
1	4月	2日	★★★	鈴鹿：銚子ヶ口	6人	石田 信郎
2		5日	★★	恵那山塊：ロクロ天井	11人	山田 明美
3		7日	★★	神戸：六甲山	10人	天野 俊明
4		8日	★★	鈴鹿：釈迦ヶ岳	8人	鈴木 慎吾
5		15日	★★	鈴鹿：高畑山	11人	伊藤 純一
6		26日	★★	毛無山塊：雨ヶ岳～竜ヶ岳	5人	石井 仁
7		29日～30日	★★★	鈴鹿：北谷尻谷～クラシ	7人	天野 俊明
8	5月	3日～4日	★★★★	北ア：鹿島槍ヶ岳	申込者少なく中止	栗木 洋明
9		6日	★★	鈴鹿：クラシ	6人	天野 俊明
10		12日～13日	★★★★	中ア：宝剣岳～駒ヶ岳	荒天のため中止	山田 明美
11		14日	★★	伊吹山地：北尾根	10人	伊藤 祐幸 吉田 俊紀
12		27日	★★	鈴鹿：国見岳	6人	伊藤 純一
13		27日	★★★	大高山地：池木屋山	申込者少なく中止	石井 仁
14		3日	★★★	鈴鹿：元越谷（沢登り）	リーダー都合により中止	西山 秀夫
15	6月	3日～4日	★★☆	白山山系：銚子ヶ峰・三ノ峰	6人	吉田 俊紀
16		9日～11日	★★★★	南ア：甲斐駒ヶ岳（黒戸尾根）	6人	岡本 英俊
17		10日	★★	奥美濃：花房山～小津権現山	6人	石井 仁
18		24日	★★	鈴鹿：イブネ・クラシ	7人	天野 俊明
19	24日～25日	★★☆	富士山：双子山	内容を変更して実施	8人 伊藤 祐幸	
20	7月	1日	★★★	奥美濃：土蔵岳	申込者少なく中止	石田 文男
21		1日～2日	★★	奥美濃：竹屋谷（沢登り）	リーダー都合により中止	西山 秀夫
22		3日	★★☆	白山山系：三ノ峰	雨天のため中止	鈴木 慎吾
23		15日～16日	★★★★	中ア：檜尾岳～伊那前岳	4人	石田 伸郎
24	22日～23日	★★★★	南ア：池口山	5人	石井 仁	
25	29日	★★	京都トレイル：清水山・大文字山	7人	天野 俊明	
26	29日	★★★★	中ア：江ノ川（沢登り）	リーダー都合により中止	西山 秀夫	
27	8月	17日～19日	★★★★	北ア：赤木沢・薬師岳	雨天のため中止	鈴木 慎吾
28		18日～24日	★★★★	北ア：北アルプス大縦走	参加者少なく中止	天野 俊明
29		30日	★★	裏木曾：白草山	5人	石井 仁
30	9月	2日	★★☆	中ア：烏帽子岳	5人	石田 伸郎
31		21日～24日	★★★★	北ア：西穂高岳～奥穂高岳	雨天のため中止	山田 明美
32		27日	★★☆	奥美濃：左門岳	雨天のため中止	石井 仁
33	10月	29日～1日	★★☆	北ア：奥大日岳～大日岳	5人	林 康太郎
34		8日	★★	木曾山地：坊主岳	5人	大矢 英詞
35		14日～16日	★★★★	北ア：黒部下の廊下	コース未整備のため中止	石井 仁
36		21日～22日	★★	恵那山塊：南沢山～富士見台	雨天のため中止	林 康太郎
37	11月	30日	★★	越美山地：三周ヶ岳	雨天のため中止	吉田 俊紀
38		3日	★★	高島トレイル：乗鞍岳	21人	市川 義行
39		11日	★★	裏木曾：高時山	8人	石井 仁
40		18日	★★	金勝アルプス：白石峰・竜王山	雨天のため中止	林 康太郎
41	12月	26日	★★	鈴鹿山系：鎌ヶ岳	7人	伊藤 純一
42		2日	★	西濃：清滝山	10人	伊藤 祐幸
43		6日	★	島田：八高山	6人	石井 仁
44		8日	★	阿智：高鳥屋山・梨子野山	日にちを変えて実施	7人 鈴木 慎吾
45	1月	17日	★	京都トレイル：大文字山	12人	天野 俊明
46		4日～5日	★★	山梨：竜ヶ岳・長者ヶ岳	6人	栗木 洋明
47		6日	★★	瀬戸市東方：猿投山	5人	大矢 英詞
48		10日	★	高見山地：学能堂山	7人	石井 仁
49	2月	26日	★★	湖北：賤ヶ岳	日にちを変えて実施	6人 鈴木 慎吾
50		27日	★★	湖北：新谷山	積雪のため中止	伊藤 祐幸
51		27日	★★☆	奥三河：平山明神山・岩古谷山	5人	林 康太郎
52		3日	★★	高見山地：三峰山	5人	石田 伸郎
53	3月	10日～11日	★★	霧ヶ峰：車山 北八：北横岳	荒天のため中止	稲葉 真英
54		24日	★★★★	奥美濃：湧谷山	参加者少なく中止	伊藤 祐幸
55		28日	★★	高見山地：修験業山・栗ノ木山	8人	石井 仁
56	3月	17日	★★★★	九頭竜川流域：細谷又山	(予定)	5人 伊藤 祐幸
57		24日	★	高島トレイル：赤坂山	(予定)	20人 市川 義行
58		24日	★	京都トレイル：比叡山	(予定)	9人 天野 俊明
59	3月	28日	★★	伊吹山東：池田山	(予定)	8人 石井 仁
60		31日	★★	鈴鹿山系：霊仙山	(予定)	8人 鈴木 慎吾
					延参加者数	312人 (294人)
					平均参加者数	7.6人 (7.5人)
						(昨年度)

※ 本年度も魅力的な山行を計画しています。奮ってご参加ください。

会 務 報 告

【2017年11月常務委員会】

日時：11月22日(水) 19時00分～20時45分

1. 支部長挨拶(高橋)：11月15日に広島支部の方3人が意見交換のため来訪。支部員の高齢化に対応すべく新しい組織を作ることを模索している中で、東海支部の亀の会の組織・活動内容を勉強したいということで、主に亀の会代表の加藤守彦氏に対応していただいた。学生連盟の総会が17日にあり、新しい委員長が選出され、澤井から丹羽になった旨報告。猿投の第2次捜索が行われるので、皆様にはご協力をお願いしたい。また12月2日には晩餐会、と同時に代表者会議が開催されるので出席予定。各支部における登山届のチェック、事故報告等について話し合う予定との報告。

2. 委員会報告

①会計(市川)：報告事項なし

②支部友委員会(金谷)：配布された資料に基づき10月～11月の山行及び今後の支部友ミーティングについて報告。2月及び4月の支部友ミーティングは支部員にも是非参加いただきたい。

③山行委員会(鈴木)：配布された資料に基づき10月～11月の山行及び今後の山行計画について報告。3月にリーダー会議を開催予定。30年度のリーダーについて今年度より減少の見込み。是非、新たに引き受けていただける方がいたらお願いしたい。

④亀の会(加藤)：11月15日、広島支部との意見交換行った。支部員の高齢化に伴い、疎遠になる会員が多くなったとのこと。活性化のため2時間半ほど意見交換した。11月10日京都、笠置山にて傘寿を祝う山行を実施した旨報告。

⑤猿投の森づくりの会(小川)：配布された資料に基づき11月～12月の活動について報告。11月11日森の探検隊は園児78名はじめ95名が参加し実施。11月25日法人会員デーとして各企業から参加者が集まり作業体験を行う。森の音楽祭は、天候が悪く残念だったが、皆様のご協力にて演奏会を行うことができた。

⑥森の音楽祭委員会(毛利)：あいにくの天気だったが瀬戸市長代理はじめ来賓を迎え、パーティセとで演奏会を実施。291名が参加。200名ほどが不参加だったが、このことから第2部の期待度が高いことがわかった。来年も10月27日に実施予定。第10回となるため、新たな趣

向も検討したい。

⑦東海ユース(山田)：配布された資料に基づき10月～11月の活動及び今後の計画について報告。2月24日に青年部と合同で懇親山行を実施予定。

⑧遭難対策委員会(山田)：猿投の第2次捜索について12月16日～24日、のべ118名の協力をいただき実施予定。11月30日に説明会を実施予定。前回は線の捜索だったが、今回は面捜索とする。10月27日本部より遭難対策委員長が来訪。意見交換を行った。本部への登山届の提出方法について支部名を入れて欲しいとの要望があり、提出する際のルールを支部で統一することとし、周知したい。

⑨支部報編纂委員会(星)：No.152についてはほぼ原稿が出揃ってきたが未提出の方は提出いただきたい。

⑩海外登山・インドヒマラヤ(星)：書籍「インド・ヒマラヤ」の増補改訂版、英訳版、韓国語版出版について配布された提案資料に基づき説明。特に韓国語版については世界的出版物としてオファーがあり、大変良い内容。東海支部名にて出版することについて了承いただきたい。→了承。

⑪青年部(藤崎欠席のため高橋)：配布された資料に基づき10月～11月の活動について報告。11月の雪上訓練については今年は雪が多いため、予定していた剣から西穂高岳に変更。

⑫登山教室委員会(天野)：中日登山教室の生徒は13名になった。フェイスブックに記事が載ったため、応募があるかもしれないが、13名では継続が厳しい。15名を超えた場合には継続したい。

⑬登山学校運営委員会(天野)：配布された資料に基づき、10月～12月の活動及び運営委員会での議事について報告。欠席の多い受講生、来年の募集、共同装備の購入について等検討中の旨報告。1月～2月頃に現受講生に継続の意思確認を行う予定。

⑭自然保護委員会(井藤)：配布された資料に基づき活動報告。カヤネズミについて東浦町の方に案内いただき、生息場所の見学等行う予定。

⑮ボランティア委員会(前田)：配布された資料に基づき10月～11月の活動及び今後の活動について報告。今年度の事業については無事終了の旨報告。

⑩写真展実行委員会(井上):配布された資料に基づき写真展の応募状況等について報告。新規応募者の開拓として登山学校生等へ勧誘を行う予定。

⑪デジタルメディア委員会(井上):11月に回線切り替え予定と報告したが、問題が新たに判明したため、もう少し切り替えに時間がかかる予定。

⑫技術向上委員会(片岡):2月24日、野口いずみ氏を迎え講演会実施予定。また、3月に「山での救急対応」について三浦氏による講習を実施予定。

⑬19 東海学生山岳連盟(丹羽):配布された資料に基づき報告。11月17日の総会にて新委員選出。ゴザフェスの反省点をまとめているところ。アルパインクライミングのできる人材育成として冬山強化プロジェクト「プロジェクトK」を実施予定。

⑭その他(高橋):支部山岳カレンダーについて12月15日までに申し込み及び振込をされた方へは支部報に同封して送付予定。斡旋方法について近日中にメルマガで支部員へ周知したい。出席:高橋、山田、片岡、尾上、市川、鈴木、加藤、前田、星、天野、小川、井上、井藤、毛利、金谷、丹羽

【2017年12月常務委員会】

【2018年1月常務委員会】

日時:1月24日(水)19時00分~20時00分
1. 支部長挨拶(高橋):前回の本部に於ける代表者懇親会において、支部山行も個人山行も日本山岳会を通していく全ての山行について本部への登山計画書提出をお願いすることとなったので、東海支部の登山届け用メールアドレスは、届いた登山届を本部に自動転送する事としたいとの提案-反対なしで承認。広島支部から正式な事故報告書があがってきたが、支部主催の登山活動はまだ再開されていない旨報告。年末の常務委員会忘年会への出席は東海支部から7名、新年会の出席は70名と低調であった。これをふまえ、今後の集まりの有り方を考えていきたい。山田利行会員が10月に日本に一時帰国するのでその際、彼主導で研修・講習会を開くことを計画したい旨報告。また愛知県岳連への個人登録は、現在東海支部からは3名と少ないので、今後東海支部の費用負担での個人登録数を増やす方向で検討したい旨発言。
2. 委員会報告

①支部友委員会(金谷):登山学校の生徒を支部友会に受け入れたことに伴い支部友の会員が急増している中で出てくる問題に対し適切に対応してほしい旨、山田副支部長より依頼を受けている旨報告。配布された議事録に基づき12、1月の山行につき報告。支部友ミーティングは、12月12日新入会員歓迎会と忘年会の実施。2月・4月の支部友ミーティングは議事録記載の通り開催予定。登山学校のスタートに伴い経費が増加しているため来年度予算を15万円にupする方向で、検討していただきたい旨の報告。

② 山行委員会・登山教室・登山学校・技術向上委員会(鈴木):

山行委員会-配布された議事録にもとづき、山行の報告。リーダー会議を3月26日に行う。山行実績を支部報に掲載することとした。また参加者が固定してきているのでLINEの活用などを検討していく事とした。

登山教室-中日新聞主催の講座は14名が残ったのでH30年度も継続していく事となった旨報告。

登山学校-現在の90名弱の生徒数を来年度は50名程度に減らす方向で検討中である旨報告。

技術向上委員会-1月6日開催の山岳気象の講座は、ためになったと好評であった。参加者97名

③亀の会(加藤):新入会の会員は1人。新年会で使用したスクリーンの位置が低く見えにくかった。広島支部の報告について“災害と高齢者”との記載については不満が残る排除の思想がみえた。また二村さんの事故死は病死で終わっているが亀の会の会員としては大変関心のあるところでもう少し詳しく聞きたいと思ったとの事。

④猿投の森づくりの会(小川):本日欠席の為、報告書のみの提出。

⑤支部報編集委員会(星):次号は4月1日号。原稿締切りは2月末日。支部長からプロジェクトK、新年会、写真展の報告、インドヒマラヤ韓国版の件、今年のボランティア活動について等の掲載予定している。

⑥インドヒマラヤ出版について(沖):韓国の出版社から韓国語に訳したいとの依頼もあり、初版1000部で計画。訂正・増補版も初版の在庫なくなり次第発行を予定。英語版も出版に向け準備中である旨報告がなされた。これらは全て、

東海支部の責任で行う予定である旨報告。

⑦会計(市川)：カレンダー販売について、会計には312,300円入金されており部数にして625冊販売された。経費が280,000円で利益は30,000円程となった。残りは100部程ある。

⑧青年部(藤寄)：欠席の為、H30年度事業計画の提出があった。

⑨自然保護委員会(井藤に代わり佐野)：モニタリング1000と言う環境省の調査を取り組むが、県の環境部の方に説明する為、来月にも県の環境部へ行く事になっている。

⑩ボランティア委員会(前田)：第9回ひまわり登山は視覚障がい者4名、支援者10名で2月に実施する。春のブラインド登山は3つの候補を出しており2月1日の抽選結果を待っているところ。抽選にすべて外れた場合は公共交通機関利用、行き先は抽選結果判明時に検討予定。試験観察中の少年支援登山については、裁判所との調整は順調に進んでおり3月中に現地調査を行いたいという希望がある。裁判所の職員と共の会のメンバーで5名東海支部ボランティア委員会から有志数名で3月27日に朝明茶屋に集合して下見を行う。実施は4月以降になる予定。次年度委員会構成に関しては次回委員会までに決める。

⑪遭難対策委員会－猿投山搜索活動の報告書が提出された。第2次搜索は累計148名の参加で活動したが結果は見つからなかった。詳細は記載の通りとの報告がされた。青山様から寄付が10万円あった。遭対費用として受けた。登山届の実績報告は、別途常務委員会報告資料としてメールする旨の報告がされた。

⑫写真展実行委員会(箕浦)：現在のところ参加数は80点位の見込み。まだ余裕があるので是非出して欲しい。既に一部校正に入っているのなるべく早くお願いしたいとの事。応募数について人数は経験者が56名、新規が11名で合計67名。目標が70名以上なのでほぼ達成。参加点数については応募経験者の数が67点数、新規の数が11点数で合計78点数。目標が80点数以上なのでほぼ達成している状況になった旨報告がされた。後は皇太子殿下作品の受入れの準備、写真山行を12月の暮れに実施し、2月に予定しているとの事だった。

⑬総務(毛利)：個人情報の利用目的について－資料配布。東海支部の事業及び個人情報の利用目的及び個人情報は利用目的以外には使用しない旨記載したものを、支部報並びにHPにて

告知する旨報告。新規に入会する支部員・支部友・登山学校の生徒に対しては個人情報提供の同意書提出を求めることとする事も合わせて報告。東海支部ガイドの住所録については、今後、名前と会員番号と所在市までのみの記載に変更する旨報告がされた。個人情報利用目的の資料については、一部文言修正の上公表することとなった。

出席：高橋、佐野、箕浦、前田、加藤、星、毛利、金谷、鈴木、市川、沖

【2018年2月常務委員会】

日時：2月28日(水)19時00分～20時30分
1. 支部長挨拶(高橋)：登山計画書について、全て本部へ提出することとなった。従来よりお話ししているとおり、支部へ提出いただいたものを転送する方法で対応予定。詳細については整理して次回の常務委員会にて提示。

また、各委員会とも次年度の体制が決まりつつあるかと思う。組織活性化へ向け、若手登用も検討いただきたい。

2. 委員会報告

①支部友委員会(金谷)：配布された資料に基づき1月～3月の山行及び2月、4月の支部友ミーティングについて報告。今月より、各支部友山行計画をルートなど委員会全員で検討することになった。

②山行委員会(鈴木)：配布された資料に基づき1月以降の山行及び今後の山行計画について報告。今後の山行のあり方について、LINEグループを活用した山行募集について提案があり、リーダー会議にて意見交換の予定。

③亀の会(加藤)：配布された資料に基づき12月以降の山行及び山行計画について報告。今後、山へ行けなくなった支部員について交流する場を検討したい。支部としてもそういった企画を行ってはどうかとの意見もあった。

④会計(市川)：今年度、会費未納者が30名。来年度、2年分を請求予定。うち、1名が3年目となっているため、納付がないと退会となる。

⑤岳連(鎌倉)：2月24日～25日に雪山登山講習実施。登山学校上級クラスから3名の参加があった。

⑥猿投の森づくり委員会(小川)：配布された資料に基づき2月の活動及び3月～4月の活動について報告。4月14日に山桜観桜会を開催。是非、多くの方に参加いただきたい。

⑦登山教室・登山学校委員会(天野氏欠席 今津氏代理)：中日について14名のため次年度前

期は継続。1月の登山学校の山行及び3月の山行計画について資料に基づき報告。第二期に向け、指導要綱についてもう少し時間をかけて検討予定。カリキュラムについてはほぼ出来上がってきた。継続希望者が多く、新規募集は厳しい状況。

⑧青年部(藤寄):2月24日に東海ユースとの交流登山実施。青年部ではブログをやっているが、新入部者はネットで見てという方が多い。山行報告などブログの更新を徹底していきたい。

⑨東海学生山岳連盟(丹羽):冬山強化プロジェクト「プロジェクトK」の実施状況について配布資料に基づき順調に進んでいる旨、報告。

⑩支部報編集委員会(星):No.153について現行の提出状況を配布資料に基づき報告。未提出の方は締め切りまでに提出いただきたい。

⑪自然保護委員会(井藤):配布された資料に基づき活動について報告。カヤネズミ、カエル類についてモニタリング調査について4月から実施で調整中。

⑫ボランティア委員会(前田):配布された資料に基づき2月の活動及び今後の活動について報告。試験観察中の少年少女の登山サポートについて家裁と順調に調整が進んでおり、3月に下見山行を行う。

⑬写真展実行委員会(井上):配布された資料に基づき写真展の募集結果、進行状況について報告。75名から87点の写真が集まった。是非、来場いただきたい。

⑭遭難対策委員会(山田氏欠席につき、報告事項については配布資料参照)

⑮海外登山(高橋):カナダノーザンカリブー山郡山スキー縦走について配布資料に基づき説明。成功したパーティは数パーティという難易度が高い計画。チャレンジ基金の対応をお願いしたい。→了承。

⑯インドヒマラヤ(星):まだメンバーについて全員は決まっていないが、3月中に決定予定。8月に実施。インドとの調整は今後行っていく。

⑰技術向上委員会(片岡):2月24日、野口いずみ氏を迎え講演会実施。2月25日は野口氏と入道ヶ岳にて参加者10名と実地講習を実施した。3月3日は名市大にて救急講習実施予定。出席:高橋、片岡、尾上、市川、鈴木、加藤、前田、箕浦、星、小川、井上、井藤、毛利、金谷、丹羽、藤寄、鎌倉、今津

ル ーム 日 誌

—・— 1 2 月 —・—・—・—・—・—

- 1(金) 古道塩の道
- 4(月) 支部友委員会
- 5(火) 県岳連
- 6(水) 青年部/TNCC(同好会)
- 7(木) 写真展委員会
- 11(月) 登山教室委員会
- 12(火) 支部友委員会ミーティング
- 14(木) 自然保護委員会
- 18(月) 図書委員会、読図会
- 19(火) ボランティア委員会
- 20(水) 山行委員会/総務委員会・正副支部長会議
- 21(木) 東海学生連盟
- 26(火) 猿投の森運営委員会
- 28(木) 技術向上委員会

—・— 1 月 —・—・—・—・—・—

- 5(金) 古道塩の道
- 9(火) 支部友委員会
- 10(水) 青年部/TNCC
- 11(木) 自然保護委員会
- 12(金) 写真展委員会
- 15(月) 図書委員会、読図会
- 16(火) ボランティア委員会
- 17(水) 山行委員会/総務委員会井・正副支部長会議
- 18(木) 東海学生連盟
- 19(金) 県岳連
- 23(火) 猿投の森運営委員会
- 24(水) 常務委員会
- 25(木) 技術向上委員会
- 26(金) 亀の会

—・— 2 月 —・—・—・—・—・—

- 1(木) 写真展委員会
- 2(金) 古道塩の道
- 5(月) 支部友委員会
- 6(火) 県岳連
- 7(水) 青年部/TNCC(同好会)
- 8(木) 自然保護委員会
- 13(火) 支部友委員会ミーティング
- 14(水) 登山教室・登山学校
- 15(木) 東海学生連盟
- 19(月) 図書委員会、読図会
- 20(火) ボランティア委員会
- 21(水) 山行委員会/総務委員会・正副支部長

会議
22(木) 技術向上委員会
27(火) 猿投の森運営委員会
28(水) 常務委員会

退会：内藤芳夫(12423) 伊藤康信(15195)
トヨタ自動車(3917)
加藤ちづ子(14319) 吉川友章(5801)
岡島朋子(15916)
物故：二村秀広(9624) 大坪重遠(9594)
福島寿信(15224)

会員異動

入会：小澤佑介(16281) 脇海道 卓(16282)

総務委員会からのお願い

「東海支部だより」メール配信システムへの登録について

日頃は東海支部ならびに支部友会活動にご協力頂きありがとうございます。
「東海支部だより」にメールアドレスの登録を済ませていない方は、この機会にぜひ登録をお済ませください。また、過去2年間にメールアドレスを変更され、変更手続きを済ませていない方には東海支部便りが届いていないと思います。下記手順および注意点参照の上、変更手続きを済ませてください。

「東海支部だより」のメール配信システムへの登録は東海支部の HP から、下記の手順で簡単に行う事が出来ます。「東海支部だより」は、毎月1回程度配信しております。

(注意点)

※ 登山学校の受講生の方については、一括登録しております。届いていない方は、ご自身で登録をお願いいたします。

※ 携帯メール(ガラ携)は、携帯メールの字数制限などで、正しく受信できない場合もあります。

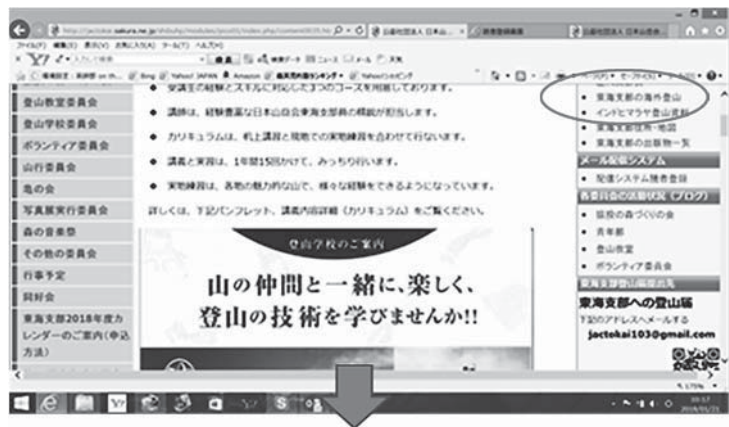
※ メールアドレスを変更した時は、速やかに旧アドレスを登録解除して、新しいアドレスを新規登録してください。

※ 受信用メールアドレスを追加する場合は、「新規登録」と同じ手順で行ってください。

問い合わせ先：

東海支部だより事務局
今津

(imazu.eitirou@maroon.
plala.or.jp)



INFORMATION

【総務委員会からのお知らせ】

【平成30年度支部総会・懇親会のお知らせ】

支部総会を下記日時と場所にて開催します。本年度は神戸大学山岳会会長の井上達男さんをお招きし『未知への挑戦』と題し、東チベット・カンリガルポ山群の紹介、魅力ある山の選択・同定、ロプチン（KG-2、6805m）初登頂などについて魅力ある講演をいただく予定です。

期 日：平成30年5月20日（土）

時 間：総会・来賓講演：午後4時～6時

懇親会：総会・講演終了後

場 所：総会・講演：OMCビル4階講堂(412)

懇親会：東海支部ルーム

会 費：懇親会参加者2,500円程度

（学生：1000円）

※同封した返信用ハガキに総会・懇親会出欠を明記の上、速やかにご返送ください。尚、総会欠席の方は委任状のご提出も併せてお願いいたします。

【第6回夏山フェスタ開催のお知らせ】

第6回夏山フェスタが下記要領にて開催されます。東海支部も全面的にバックアップしていますので、皆様お誘い合わせの上ご来場ください。

日 時：6月23日（土）～24日（日）

場 所：愛知県産業労働センター

ウインクあいち7F・8F

主 催：夏山フェスタ実行委員会

事務局：中部経済新聞社 事業部

イベントの内容：

- ① 山に関するセミナー、著名人の講演会
華絵さん、四角友里さん、なすびさん、小林千穂さん、実川欣伸さんらの出演が内定しています。
- ② 登山用品メーカー、関連団体、自治体などによるブース出展・東海支部も相談コーナー他の出展を予定。
- ③ 山小屋・山岳関連団体の相談コーナー
- ④ 山岳写真展など。

※詳細は、別紙チラシをご覧ください。

総務委員長 毛利 邦男

【写真展実行委員会からのお知らせ】

下記のような写真撮影山行を企画しています。

是非、参加をご検討ください。

写真撮影山行では、登攀・歩行を少なくし、写真を撮影できる自由時間を多くした、山の景色や花などの撮影対象が多い場所への山行を計画しています。カメラはコンパクトデジカメ、三脚無しでもOKです。

① 富士山（の撮影）

・月日：4月下旬を予定（1泊2日）

・交通手段：自動車

・宿泊：未定

・撮影対象：富士山

・申込締切：4月15日

・OBの篠原さん（静岡県在住）に案内して頂く予定。

② 西穂高（独標）

・月日：5月6日～7日（1泊2日）

・交通手段：自動車

・宿泊：西穂山荘

・撮影対象：雪の穂高連峰

・申込締切：4月15日

③ 涸沢カール（ヒュッテまで）

・月日：6月中旬を予定（2泊3日）

・交通手段：自動車

・宿泊：涸沢ヒュッテ、横尾山荘

・撮影対象：雪の涸沢カール、奥穂、北穂

・申込締切：5月15日

※東海支部のHPに詳細を掲載します。メニューで「写真展実行委員会」をクリックしてください。月日や行程、移動方法は参加希望者との相談で変更する可能性があります。

※参加希望、問い合わせは、次のメールアドレス shasin@jactokai.net または、写真展実行委員までお願いします。

写真展実行委員長 井上 寛之

編集後記

支部の新しい試みを掲載できることは、編集担当として大変うれしい。今号では、登山学校の次年度に向けた活動指針や、青年部員によるカナダディアンロッキーの14日間スキー縦走計画、ボランティア委員会では、第4の活動として、身柄補導付き登山を始める等である。今年の飛躍を期待したい。 星 一男

